主体的に自立と共生を目指すことのできる生徒の育成
～家族・地域とのつながりにおける問題解決的な学習を通して～

草加市立栄中学校　　教諭　三浦　憲子
川口市立上青木中学校　教諭　渡辺　かおり

１　はじめに

ここ数年，日本だけにとどまらず，世界中が大きく変貌していることなどは，日々の様々な情報から読み取ることができる。とりわけ，日本が直面している社会課題のうち，少子高齢化社会については，諸問題とその政策が繰り返し発表されている印象さえ受ける。また，ＡＩ（人工知能）技術の進展とネット社会の急加速度的な変化に対応すべく，学校においては子供たち一人一人に個別最適化され，創造性を育む教育 ICT 環境の実現が求められている。今後も生活が様々な方向に急速に変化しようとも，それを主体的に受け止め，よりよく対応できる力が技術・家庭科の目指す資質や能力であり，その力の獲得のため，生徒が主体となり課題の解決に向かう授業改善が求められている。

このようなことから，第５分科会では、引き続き主体的に自立と共生を目指すことのできる生徒の育成を目指して研究を進めた。

２　研究のねらい

（１）生徒の実態

令和５年度，本分科会では内容Ａ「家族・家庭生活」を研究の中心に据え，自分自身の生き方の選択や将来の展望に応じ，様々に変化する課題と向き合える生徒を育成したいと考えた。

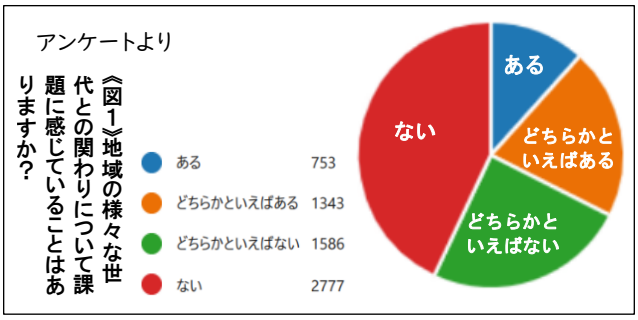
そこで，研究を進めるにあたり，南部地区の生徒約 6,500 人を対象とした調査の結果は以下の通りである。

質問項目「家庭生活で課題（もっと改善したい，工夫したいなど）に感じていることはあるか」では，自分の食生活に対して課題に感じている生徒は多いが，内容Ａ「家族・家庭生活」で取り上げる幼児・高齢者や地域との関わりに対して課題があると感じている生徒は少ないことが分かった。

そこで，「地域の様々な世代（幼児～高齢者）との関わりについて課題（もっと改善したい、工夫したい など）に感じていることはあるか。」と問い直したところ，「ある・どちらかというとある」は４割，「ない・どちらかといえばない」は６割の回答であった。このことから、南部地区の生徒においては，昨年度のアンケート調査と同様に，祖父母などの高齢者と生活を共にする生徒が少なく，幼児とも接する機会が乏しいことが分かった。

更に、「問題だと感じているそれらの課題を解決する方法を考えることができるか。」との問いに対しては，「考えられるし解決できる」と回答した生徒が３割に対して，半数近くの生徒は「考えられるが解決できない」，１割の生徒は「考えられないし、解決できない」，２割の生徒に至っては「考えたことがない」と回答している。

これを受けて上記の「課題を解決するために活用したい方法」を尋ねたところ，「家族に相談・助けてもらう」が大半を占めていた。



また，約 25%の生徒が「家庭生活において課題に感じていることはない」と答えており，課題に気づいていない生徒もいるのではないかと考えられる。

（２）目指す生徒像

> 家庭生活の変化に見通しを持ち，よりよい生活の実現に向けて，主体的に課題解決に取り組み，生活を工夫・創造し実践できる生徒

県の研究テーマ『未来社会を切り拓くための資質・能力を育む学習指導』の研究を受けて，本分科会では「未来社会」を〈将来の自分と今の家族〉〈将来の自分の家族〉〈将来の自分と今の地域〉〈将来の自分の地域〉，「切り拓く」を〈変化していく社会に対応する〉〈変化していく家族の形に対応する〉〈変化していく地域に対応する〉と，捉えて研究を進めた。

これらを発展させ，本分科会では研究テーマを『主体的に自立と共生を目指すことのできる生徒の育成～家族・地域とのつながりにおける問題解決的な学習を通して～』と設定した。目指す生徒像においても「家庭生活の変化に見通しを持ち，よりよい生活の実現に向けて，主体的に課題解決に取り組み，生活を工夫・創造し実践できる生徒」とし，習得した「知識及び技能」を活用し，思考，判断，表現することにより，これからの生活を展望して，主体的に問題を解決する力を育成したいと考えた。

（３）研究仮設

> 将来の家庭生活を展望するなかで，問題を発見し，見通しを持って課題を解決していく学習過程による学びを繰り返すことで，主体的に生活をよりよくしようとする力が身に付くであろう。

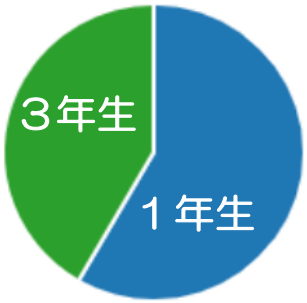
生徒が生活する空間軸である「家庭・地域・社会」と，時間軸「主にこれからの生活を展望した現在の生活」を意図的に関連させ、生徒が「家族・地域・社会の一員」であることを自覚し，様々な問題を自分事として捉えて課題を設定し，解決していく学習過程を繰り返すことで，自らの生活を，主体的によりよくしようとする能力や態度が身に付くであろうと考えた。

３　研究内容

（１）教員へのアンケート調査

南部地区の教員対象のアンケート調査を行い，①内容Ａ（１）ア【自分の成長と家庭生活との関わり、家族・家庭の基本的な機能、家族や地域の人々との協力・協働】《図２》，②内容Ａ（２）ア（ｱ）【幼児の発達と生活の特徴、家族の役割】（イ）【幼児の遊びの意義，幼児との関わり方】イ【幼児との関わり方の工夫】，③内容Ａ（３）ア(ｱ)【家族の協力と家族関係】，(ｲ)【家庭生活と地域との関わり，高齢者との関わり方】，④内容Ａ（３）イ【家族関係をよりよくする方法及び地域の人々と協働する方法の工夫】《図３》について，年間指導計画ではどの学年に配置しているかを複数回答で尋ねたところ，①は１学年でガイダンスをしたのちの学習と，【家族や地域の人々との協力・協働】については３学年でも他の内容と関連させて配置していた。②では，大多数が３学年もしくは２学年，③④においては，１学年もしくは３学年で履修するとの回答を得た。さらに「幼児とのふれあい体験」について尋ねたところ３学年が２学期に幼稚園もしくは保育所で実施をする学校が多いことも分かった。

《図２》
内容Ａ(１)「自分の成長と家庭生活との関わり，家族・家庭の基本的な機能，家族や地域の人々との協力・協働」は、年間指導計画ではどの学年に配置しているか



《図３》
内容Ａ(３)イ「家族関係をよりよくする方法及び地域の人々と協働する方法の工夫」について，年間計画ではどの学年に配置しているか

（２）履修計画の再検討

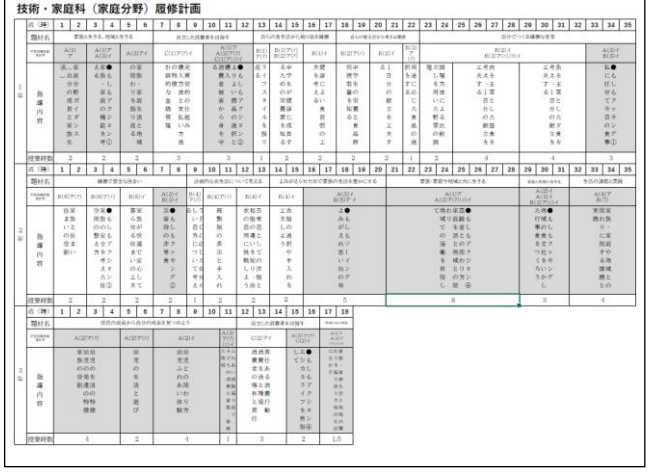
本分科会では、「家族・家庭生活」を家庭分野の学習内容ＡからＣと関わらせて学習を進めることが，よりよい生活を営むために大切であることに着目し，改めて内容Ａの履修計画のしめる学習時間の平均１５．３時間（南部地区令和２年度教員アンケートの結果より）を見直した。

内容Ａでは，他の内容との連携を図りながら学習に取り組むことで，多角的に「家族・家庭生活」を捉え，内容Ａにおける目指す生徒像の「主体的に課題解決の取り組む生徒」の実現により近づけるのではないかと考えた。

以上の点から、内容Ａと他の内容を関連付けた履修計画案が《図４》である。

また，内容Ａの学習においても，小学校からの学びの積み重ねと、高等学校への系統性を意識し，家庭や地域との関わりや自らの生涯への展望を持つという視点から学習内容を構成していきたい。

《図4》内容Ａと他の内容を関連付けた履修計画



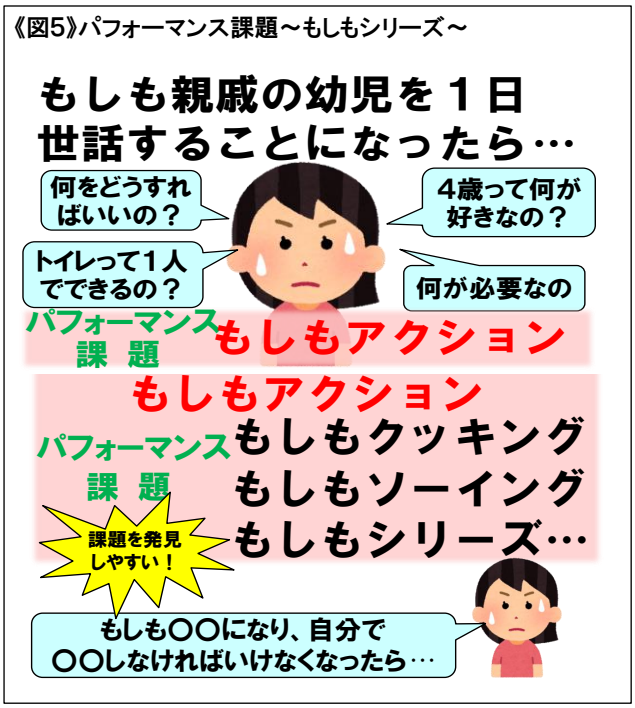
（３）パフォーマンス課題～もしもシリーズ～

本分科会の研究テーマを受け，生徒が見方・考え方を働かせて，問題への向き合い方の思考を整理したり，問題解決の過程をくり返しながら，知識や技能を習得することにより，生涯にわたって、自らや共生する人との生活をよりよくしようという主体的かつ実践的な意欲が持てるであろうと考えた。

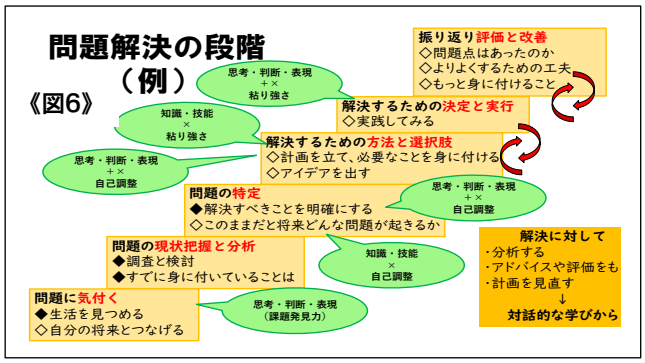
生徒はパフォーマンス課題である「もしもシリーズ」で，様々な状況を想定しながら問題の解決に向き合う。その中では現状の自分が知っていることや身に付いていること，解決後にはどんな自分になりたいのかなどを深く考え，課題を設定することになる。そして解決のために知識や技能を主体的に身に付け，よりよい解決のために調べたり，話し合ったりするなどして方法を考える。そのためには、学習過程に必要な題材設定や，時数の見通しは欠かせない。そこで履修計画では，３年間を見通し，他の内容と関連付けながら，段階的に「もしもシリーズ」を配置することにした。

パフォーマンス課題の設定では，生徒自らが，「もしも〇〇になり，自分で〇〇しなければならなくなったら・・・」《図５》のように，各内容と家族・家庭を関連させ，身近な問題を解決する学習内容を意図的に設定することで，得た知識や技能を活用する主体的な学びへとつなげることを図っている。

《図5》パフォーマンス課題～もしもシリーズ～



このように，パフォーマンス課題に繰り返し取り組むことで，課題に即し，資質や能力を向上させるだけではなく，課題解決の過程を繰り返し経験することにより，さらなる課題の発見と実践意欲につなげ，その後の学習や生活を主体的によりよくしようと取り組む生徒を育成したい。《図６》



（４）資質・能力を育成する題材の授業設計の作成

昨年度と今年度の教員及び生徒の実態調査等により，内容Ａにおいても題材の導入で，生徒が自分の生活を振り返って問題を発見し，課題を設定する場面をつくること，そこから学習者の思考の流れに沿いながら，問題解決的な学習の過程で，知識・技能の習得が活用できる概念や技能となっていることが重要であり，主体的に学習に取り組む態度の涵養へとつながるであろうと考えた。

資質・能力の育成に向けては，題材全体を見通し授業設計をすることが大切である「授業設計に必要な要素」として「見方・考え方をはたらかせるための工夫」及び「主体的・対話的で深い学びの視点に基づく学習活動」の視点から，内容Ａの題材における学習過程の一覧表を作成した。《図７》

この表の作成にあたり，①学習指導要領の目標に記載の育成する資質・能力の明確化，②小・中・高等学校との系統性等《図８》をまとめて把握し，教師の指導と評価を一体化させるようにした題材を通して，生徒が見方・考え方を働かせながら学びを深め，資質・能力を身に付けるための表の作成を通し，研究を深めることができた。

今後は，この表の「学習の過程」に沿って授業設計を行うことにより，より効果的な問題解決的な学習により，資質・能力の育成を図っていきたい。

《図7》題材の授業設計の作成例

《図8》内容Ａにおける小中高の系統性

◆小中高の系統性（内容A）

小学校	中学校	高等学校（家庭総合）
（1）自分の成長と家族・家庭生活 ア　自分の成長との自覚，家庭生活と家族の大切さ，家族との協力	（1）自分の成長と家族・家庭生活 ア　自分の成長と家庭生活との関わり，家族・家族の基本的な機能，家族や地域の人々との協力・協働	（1）生涯の生活設計 （2）青年期の自立と家族・家庭及び社会 （イ）家族・家庭の機能と家族関係，家族・家庭生活と法律，家庭生活と福祉などについて理解するとともに，家族・家庭の意義，家族・家庭と社会との関わり，家族・家庭を取り巻く社会環境の変化や課題について理解を深めること。
（2）家庭生活と仕事 ア（ア）家族の仕事と生活時間 ア（イ）家族の仕事の計画と工夫	（2）幼児の生活と家族 ア（ア）幼児の発達と生活の特徴，家族の役割 ア（イ）幼児の遊びの意義，幼児との関わり方 イ　幼児との関わり方の工夫	（3）子供の関わりと保育・福祉 （イ）子供を取り巻く社会環境の変化や課題及び子供の福祉について理解を深めること。
（3）家族や地域の人々との関わり ア（ア）家族との触れ合いや団らん ア（イ）地域の人々との関わり イ　家族や地域の人々との関わりの工夫	（3）家族・家庭や地域との関わり ア（ア）家族のと協力と家族関係 ア（イ）家庭生活と地域との関わり，高齢者との関わり方 イ　家族関係をよりよくする方法及び地域の人々と協働する方法の工夫	（4）高齢者の関わりと福祉 （イ）高齢者を取り巻く社会環境の変化や課題及び高齢者福祉について理解を深めること。 （5）共生社会と福祉 （イ）家庭と地域との関わりについて理解するとともに，高齢者や障害のある人々など様々な人々が共に支え合って生きることの意義について理解を深めること。
（4）家族・家庭生活についての課題と実践 ア　日常生活についての課題と計画，実践，評価	（4）家族・家庭生活についての課題と実践 ア　家族，幼児の生活または地域の生活についての課題と計画，実践，評価	D　ホームプロジェクトと学校家庭クラブ活動

４　成果と課題

（１）成果

教員や生徒の実態把握から，内容Ａと他の内容を関連させた履修計画の再検討とともに，問題解決を図る授業の柱として「パフォーマンス課題～もしもシリーズ～」を設定することとした。生徒が，自分自身の生活の中から問題を見いだし，主体的にその解決に取り組むことにより，生活の改善のための工夫や積極的な実践につながることを目指した授業設計に向けて研究を進めることができた。

（２）課題

「主体的に学習に取り組む態度」の評価をみとるために可視化したワークシートや，他の観点をみとるためのルーブリック評価表を作成したい。そのためには，評価の場面や方法の工夫について研修と研究を進めていくとともに，時間数の調整のための更なる履修計画の見直しが必要である。

５．参考文献

１）文部科学省：
中学校学習指導要領解説技術・家庭編
（平成２９年告示）

２）埼玉県中学校教育課程実践事例
（令和５年３月）

３）埼玉県中学校教育課程指導・評価資料
（令和３年３月）